

# 論文の和文要旨

論文題目：

La poetica del ridere nella cultura italiana del Novecento

: 3 riflessioni sulle fisionomie del riso secondo Aldo Palazzeschi, Achille Campanile, Cesare Zavattini

20 世紀イタリア文化表象における笑いに関する考察

氏名：石田聖子

\*\*\*\*\*

20 世紀は笑いが新たな意義を獲得して浮上してきた世紀である。笑いの考察はしたがって 20 世紀文化を新たな角度から照射するために有効ではないか— そうした問いのもとに発する本論は、20 世紀イタリア文化にみられる笑いに関わる表象、及び、20 世紀を代表する笑いの形態の構造と機能の考察を通じて、20 世紀に笑いが称揚された意義と併せて 20 世紀イタリア文化の特質を指摘することを目的とする。主な考察の対象となるのは、20 世紀イタリアで活躍した三人の作家、アルド・パラッツェスキ (Aldo Palazzeschi, 1885 年[フィレンツェ]—1974 年[ローマ])、アキッレ・カンパニエーレ (Achille Campanile, 1900?年[ローマ]—1977 年[ラリアーノ])、チェーザレ・ザヴァッティニ (Cesare Zavattini, 1902 年[ルツァーラ]—1989 年[ローマ]) であり、主な対象文化領域は文学と映画である。

## 第一章：笑いの歴史

全四章から成る本論の第一章ではまず、笑い理論の変遷を古代より通時的に追うことで、20 世紀的笑い分析のための予備的考察を試みる。

西洋思想史における笑い理論の起源は古代ギリシア (プラトン、アリストテレス) に求められる。当時の哲学において笑いは副次的主題に留まり、その発生は対象の性質に依存すると考えられた。下卑と関連し心身の平穩を乱す現象として蔑視される一方、プラトンにより笑いは神性の発露として擁護される。笑いを神の属性とする考えはギリシアをはじめ世界各地の神話に散見されるもので、プラトンの矛盾的認識はそのような神代の笑い観を反映するためと考えられる。笑いをめぐる哲学的考察は、アリストテレスの『詩学』発見を契機に、ルネサンス期 (マッジ、カステルヴェトロ) に再び興隆する。前人の思想を踏まえながら独自の理論形成に努めたアリストテレス注釈者らの理論は、笑いの動因を依然として対象に求めつつ笑う主体内部にて起こる反応にも意識的であるが、宗教的限界により阻まれる点を特徴とする。同時期はまた、理論面以上に実践面で注目すべき成果が出来た時期であり、笑い文学の古典の多くはこの時期に生まれた。近代 (ホブズ、デカルト、カント) に入ると、笑いは、哲学における恒常的主题となり多角的に分析される。笑う主体の感情面に生じる「優越感」、身体面において確認される「エネルギー放出効果」、笑いの対象に認められる「不適合、ズレ」に着目する今日まで笑い研究に必須の三視角は同時期にその基礎が整えられた。現代 (ボードレー、ニーチェ) に至り、初めて、笑いは思想の中心的テーマとなる。主体の認識の在り方やレベルを反映することから、笑いは、思考の方法、

人間の統合的表現、生の技術とされ、その源泉は笑う主体のうちに求められるようになる。理論の面でも、既存の諸理論を包括しつつ実践する表現的形態が求められるようになる。

20世紀的笑いの出来の経緯と特徴を踏まえ、次章以降、その最も典型的な三種の相をミノワの用語を用いて“神的笑い”“人的笑い”“悪魔的笑い”とそれぞれ名付け、具体的表象の考察をおこなう。

## 第二章：アルド・パラッツェスキの神的笑い

アルド・パラッツェスキは、想像力の意識的活用を通じて、20世紀的笑いの全貌を直観的に示したばかりでなくその理論化に初めて取り組んだ作家である。

本章ではまず、パラッツェスキの初期詩作品（『白馬』[*I cavalli bianchi*, 1905年]、『ランタン』[*Lanterna*, 1907年]、『詩集』[*Poemi*, 1909年]）の分析を通じて、20世紀的主体が見失われた状態から笑いを獲得するに至る経緯を確認する。パラッツェスキによる笑う主体とは、新しい時代が要請する生の条件に合致するべく敢えて選びとられ、意識的に演じられる主体のひとつの在り方にほかならない。

パラッツェスキ的主体の笑いは、次いで、未来派宣言「反苦惱」(*Il Controdolore*, 1914年)にて理論化される。同宣言の考察からは、ここにて称揚される笑いが、苦惱に対抗する手段として苦惱自体に起源をもつ、おかしみとは無関係な偽りの笑いであることが明らかになる。想像力に動力を得るその笑いは、破壊と再生という、現象自体が備える効力の活用を目的に発されるのである。

つづいては、その笑いが高い身体性を備える点に注目し、未来派小説『ペレラの法典』(*Il Codice di Perelà*, 1911年)の考察をおこなう。主人公ペレラの身体を形成する煙の考察からその身体性の構造を明示し、また、ペレラをめぐる言語の分析はそのアイデンティティの可能性を明らかにする。ペレラという表象を通じては、身体の潜在能力を意識的に活用し、流動的、能動的、創造的に生きる新しい時代に即した人間像が提案される。

パラッツェスキは笑いに、神代の笑い特有の生死を司る力を見出し、そのダイナミズムを応用することで、20世紀初頭の文化風潮に突破口を開くことを試みたと考えられる。そうした先駆的な役割を果たすに際し、パラッツェスキが専ら扱ったのは創造の源としての想像力であり、その発動をもって人間の従来の有限性の超克を目指す。パラッツェスキの“神的笑い”はこれら一連のプロセスを始動させる役割を果たすと考えられる。

## 第三章：アキッレ・カンパニーレの人的笑い

パラッツェスキによって想像された20世紀的笑いはカンパニーレにより徹底的に実践され、原理・原則化される。

カンパニーレ最大の特徴である領域横断性はその活動の実際にも確認できる。したがって、本章ではまず、ジャーナリズム、演劇、映画、テレビ、文学とあらゆる領域で活動を展開したカンパニーレの各領域での活動を概観することで、それら成果が自律性を保持しつつ有機的に連関し合う様を示す。同時に、そうしたカンパニーレの作家像が、イタリア民衆喜劇の伝統に則る一方で現代的作家に対しては先駆的な位置を占めることを指摘する。

次いで、カンパニーレの小説『この愛って一体?』(*Ma che cosa è quest'amore?*, 1927年)を例に表現レベルにおける領域横断性を検討する。知的に笑いを量産するカンパニーレの物語手法は映画特有の手法に対比しうることから、“モニタージュ”、“視点”、“言語”をキーワードにその手法を分析し、ジャンルの横断がカンパニーレ独特の“間メディア的エクリチュール”により体系的に実現される様を例示する。以上の分析は他方で、映画が本質的に笑いとは基盤を共有する芸術形態であることも証する。

次いで、カンパニーレ作品が典型的に誘発する笑いの形態であるイロニーの構造分析をおこなう。特定の認識に由来し、欺瞞的で且つ教育的である修辞としてのイロニーはまたスペクタクルと20世紀的メディアを考えるに根本的な概念でもある。したがって、イロニーとテレビの構造比較から出発し、カンパニーレによるイロニーの最良の発現形態であるテレビ評論家としての活動と成果をテレビ評論集『国民による国民のためのテレビ』（*La televisione spiegata al popolo*, 1989年）を参照しつつ検討する。

カンパニーレをめぐる一連の考察からは20世紀文化の原理としての逆説の効能が明らかになる。カンパニーレの手法は、主体を没し対象との間に批評的距離を介在させる視点を導入することで笑いをシステムティックに量産することが可能となることを実践的に示す。無限に対峙しつつ敢えて有限性のうちに留まることを選ぶそうした逆説的展望のもとに生きる人間に寄り添い、励まし、慰安するのがカンパニーレの“人的笑い”なのである。

#### 第四章：チェーザレ・ザヴァッティーニの悪魔的笑い

カンパニーレが知的に笑いを繰り出す手法を編み出したとすれば、ザヴァッティーニはその知をさらに感情と統合することで笑い與人間の別次元の開拓を目指す。

本章ではまず、同時期に活躍し、20世紀イタリアを代表するユーモリストとして並び称されるのが常のザヴァッティーニとカンパニーレの反発的で親和的な関係を考察する。年長のカンパニーレへの強烈な競争心がザヴァッティーニの独自性を育んだ経緯と、笑いをめぐり統制が敷かれたファシズム体制下で発行されたユーモア新聞「セッテベッロ（*Settebello*）」での共同活動の実態と成果を概観した後、カンパニーレの『この愛って一体？』とザヴァッティーニの『ぼくについてたくさん話そう』

（*Parliamo tanto di me*, 1931年）を例にとり、ふたりの作家の言語表現レベルにおける相関性を指摘する。

人間性の抽象化を特徴としたカンパニーレに対し、ザヴァッティーニ詩学は“わたし（io）”をその根源に認めることから、つづいては、初期小説三作品『ぼくについてたくさん話そう』、『貧乏人は狂っている』（*I poveri sono matti*, 1937年）、『ぼくは悪魔だ』（*Io sono il diavolo*, 1941年）におけるナルシズム的表現の分析を通じたザヴァッティーニにおける“わたし”概念の解明を試みる。他を内包することを自覚する主体としての“わたし”（あるいは“悪魔”）の物理的現実における生にまつわる違和感とその内的変態の様子を具体的表象から確認し、また、鏡像をめぐる議論に言及しつつ“わたし”概念の理論的把握を目指す。

次に、ザヴァッティーニ詩学が典型的に喚起する笑いに関連してユーモアの考察をおこなう。現実を批判的に観察し解体するばかりでなく“省察（*riflessione*）”を加えることで関係を創出し生の全的把握を志向するユーモアは、イロニーの発展形態であり、ザヴァッティーニにおいては特に、1940年代以降、その構造を技術的に実現化する映画への関心へと繋がってゆく。パラッツェスキの『ペレラの法典』とザヴァッティーニの『善人トト』（*Totò il buono*, 1943年）の比較分析から、以上のような映画意識と経験が、似た傾向をもつこのふたりの作家を区別する際に肝要となることを明示する。さらに、『善人トト』とその映画化作品である『ミラノの奇蹟』（*Miracolo a Milano*, 1951年、ザヴァッティーニ原案・脚本）を例に、ユーモアの装置としての映画の可能性を指摘する。

ザヴァッティーニにおいてユーモアと映画はともに現実の解体と再統合を通じた生の全的表現を意図する技法として、またそれ故に、別の現実認識レベルへと進化的跳躍を果たす契機として認識され、実践される。ザヴァッティーニの“悪魔的笑い”とは、そうした一連のプロセスが完了したことを知らせる合図にほかならない。

以上の20世紀的笑いをめぐる具体的表象とその構造的考察からは、現実概念の再考を迫られた20世紀において、笑いが、生の意味への意志と、そこに発する知覚・認識

レベルの深化が実現される過程に付随して生じるものであることが明らかとなる。20世紀における笑いの詩学とは、したがって、人間とその現実意識をめぐる進化を証言するものであり、すぐれて過程の表現である笑いの称揚はまた、20世紀のその先をも示唆するのである。